

2019年度スポーツ庁委託事業

Special プロジェクト2020

「特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの
拠点づくり事業」成果報告書

2020年3月

青森県教育委員会

本報告書は、スポーツ庁の委託事業として、青森県教育委員会が実施した「２０１９年度 Special プロジェクト２０２０（特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業）」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。

1 地域が有する課題の状況

2020年の東京オリンピック・パラリンピック、2025年の国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会青森大会の開催が決定し、本県では障害者スポーツへの関心が高まっている。しかしながら、本県は、東北6県で唯一「特別支援学校体育連盟」未設置県であり、全ての障害のある児童生徒が、学校教育段階から生涯を通じてスポーツに親しむ態度を育成するための環境の充実が求められているところである。

各県立特別支援学校においては、障害者スポーツ等を取り入れるなど、児童生徒のスポーツの機会を積極的に設けているものの、学校外では、時間軸・空間軸ともにスポーツをする機会が限られているのが現状である。また、生活年齢が上がるにつれ、スポーツに積極的に取り組む者とそうでない者に二極化し、卒業後、スポーツに積極的に取り組む者はごく一部であることが報告されている。

これらの状況を踏まえ、県教育委員会が平成31年2月に策定した、本県における特別支援教育の今後10年の道筋を示す「青森県特別支援教育推進ビジョン」では、基本方針において、障害のある児童生徒が、地域社会において、障害を通じて教育やスポーツ、文化活動等に親しむことができるようにするため、地域人材を活用し、地域における活動を充実させるとともに、特別支援学校間のスポーツ・文化活動による交流を行い、生涯学習の基盤づくりに努めることを定めた。

そして、これらを効果的に推進するため、県教育委員会ではスポーツ庁の委託事業を活用することとしたものである。

2 事業実施の目的、基本的事項

(1) 目的

障害のある児童生徒の継続的なスポーツの実施促進に向けて、身近な場所でスポーツを実施できる環境の整備等を図るとともに、県内の特別支援学校の児童生徒が障害の種類や程度にかかわらず参加できるスポーツ大会を開催する。

(2) 実施体制

「青森県特別支援学校スポーツ推進委員会」を設置し、特別支援学校におけるスポーツ推進及び地域における生涯学習の基盤づくり、並びに「青森県特別支援学校総合スポーツ大会」の運営に関する指導・助言を行う。

なお、事業終了後は、県特別支援学校長会が中心となり新たに組織する「青森県特別支援学校スポーツ連盟」に事業を引き継ぐこととしている。

(3) 検討事項

ア 学校教育における、障害者スポーツ等の振興に係る地域連携の在り方について

イ 「青森県特別支援学校総合スポーツ大会」の効果的な実施について

(4) 実行委員会（推進委員会）の構成

学識経験者、スポーツ振興団体、関係部局、特別支援学校関係者等

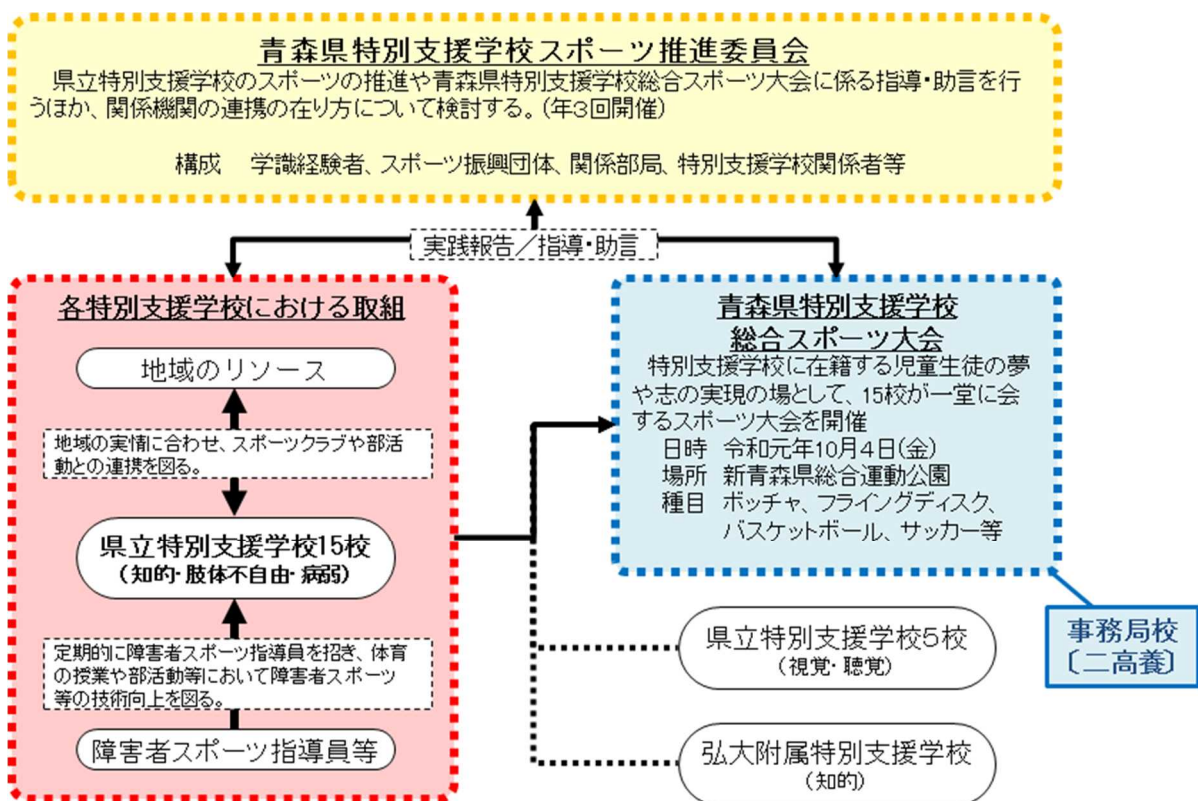


Fig.1 事業イメージ

3 事業内容

(1) 特別支援学校におけるスポーツ推進及び地域における生涯学習の基盤づくり

ア 方法

- ・ 県立特別支援学校 15 校を指定校とし、定期的に障害者スポーツ指導員を招き、体育の授業や部活動等において障害者スポーツ等の技術向上を図る。
(県内講師 1 名*2 時間*10 回)
- ・ 実施に当たっては、地域スポーツクラブ等との連携を図り、学校施設を活用するなど、児童生徒の積極的なスポーツの参加を促し、生涯スポーツの基盤づくりに努める。
- ・ スポーツの種類、連携する機関については、地域の実情に応じて各校が定める。

イ 各校の取組及び成果と課題

(ア) 青森第一養護学校

1 事業計画

(1) 自校の児童生徒のスポーツに関する現状と課題

本校では、体育の授業において肢体不自由児の実態に応じた工夫や配慮をしながら、各種スポーツを行っている。近年は、ボッチャ等のパラスポーツを積極的に単元として設定し、運動会競技や交流及び共同学習にも取り入れ、児童生徒の関心も高まってきている。一方で、ほとんどが校内での活動に留まっていること、競技スポーツとして取り組める生徒への指導が十分できていないことなどが課題として挙げられる。

(2) 本事業をとおして目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

本校は、学校経営の基本方針に据えた地域に開かれた学校づくりの一環として、学校のあ
る青森市石江地区の方々に、学校評議員や災害時における避難協力員を依頼するなどし、本
校の教育活動の理解と推進に努めている。しかし、児童生徒と地域住民が直接触れ合う機会
がなかったことから、本事業を活用し、石江地区の住民とのスポーツ交流会を企画し、地域
の方々とのスポーツ活動として継続した取組にしていきたい。

計画立案に当たり、対象を障害が比較的軽度な児童生徒と学校近隣の地域住民とし、内容
は体育で単元化して取り組んでいるボッチャとフライングディスクにした。また、児童生徒
が競技の理解や技能を高め、自信を持ってスポーツ交流会に参加できるように、障害者スポ
ーツ指導員を招いての学習会を計画的に実施する。地域住民とのスポーツを通じた交流を継
続することで、児童生徒に、卒業後にそれぞれの居住地に戻っても、支援を受けながら様々
な地域の活動に参加しようとする気持ちを育むことができると考える。

(3) 自校の取組内容

ア ボッチャ学習会

イ フライングディスク学習会

ウ 地域交流（ボッチャ）

※中級障害者スポーツ指導員の櫛引宏一氏を本校に招き、ア～ウの取組を行った。

(4) 実施内容

ア 地域スポーツ交流会（2回実施：小・中学部各1回）

①対象…学校所在地の石江江渡下町会、石江江渡中町会地区住民

②期日…11月19日（火）3校時 小学部（江渡下町内会）

11月26日（火）3校時 中学部（江渡中町内会）

③内容…児童生徒と地域住民とのゲーム

イ 障害者スポーツ指導員を招いての学習会（8回実施：小・中学部各4回）

①対象…準ずる教育課程及び知的障害教育代替の教育課程の児童生徒

②期日…9月 4日（水）2校時 ボッチャ学習会（中学部）

9月 5日（木）4校時 フライングディスク学習会（小学部）

9月 17日（火）5校時 ボッチャ学習会（中学部）

9月 24日（火）5校時 フライングディスク学習会（中学部）

9月 25日（水）2校時 フライングディスク学習会（中学部）

10月 1日（火）4校時 ボッチャ学習会（小学部）

10月 7日（月）3校時 ボッチャ学習会（小学部）

10月 8日（火）3校時 ボッチャ学習会（小学部）

③内容…各学部とも、ボッチャ×3回、フライングディスク×1回

・各回とも、ルール説明、技術練習、ゲームを実施

2 事業の成果と課題

(1) ボッチャ学習会

ボッチャの基本的なルールから、投げ方、戦術、練習方法など、幅広く学ぶことができ、
正式ルールで試合を行えるようになってきた。定期的に継続して指導を受けたことで、回数

を重ねるごとに競技の理解や技能が高まってきた。

(2) フライングディスク学習会

基本的なルール、ディスクの握り方、投げ方など、ポイントを押さえた指導を受けたことで、まっすぐに投げたり、回転をかけて投げたりすることができるようになった児童生徒が増えてきた。

(3) 地域交流会

前半の1～8回の取り組みでボッチャ・フライングディスクの技能が高まったことにより、交流の中では自信をもって競技に意欲的に取り組む姿が見られていた。また、小・中学部の児童生徒から「一緒にできて楽しかった。」「また来年も来てください。」などの感想も聞かれていた。スポーツ意欲の向上につながってきたと考える。

3 今後の展望等

次年度は、今年度と同等の取組をより円滑に行うことを目標に、各学部において体育や学級活動の年間指導計画に組み込み、計画的に実施できるようにする。加えて、年間の取組のまとめとして、地域住民とのスポーツ交流会の内容を更に充実させ、本校におけるスポーツに取り組む環境の整備と、生涯スポーツの意識向上を図っていきたい。

(イ) 青森第二養護学校

1 事業計画

(1) 自校の児童生徒のスポーツに関する現状と課題

本校のスポーツに関する取組として、日常生活の指導において全校児童生徒による朝のマラソン、体育や保健体育における陸上競技短距離走やボール運動、冬季期間の基礎スキーなどを行い、体力の向上や健康の保持増進を図っている。また、卒業生が集う同窓会では講師を依頼し、ボウリングやフライングディスクを実施している。

しかし、スポーツへの関心が高い者、継続的に取り組む者ばかりとは言えない状況である。これらのことから、児童生徒がスポーツに主体的に自ら楽しく取り組む運動習慣の定着を図ることが課題としてある。

(2) 本事業をとおして目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

在学中の様々なスポーツ経験をとおし、体を動かす楽しさや心地よさを味わいながら達成感や成熟感、充実感を得ることがスポーツの習慣化につながると考える。また、仲間と共にスポーツに励むことでスポーツの意義や価値を理解したり、地域資源を活用したりして、日常生活の一部となると考えられる。さらに、スポーツの多様な楽しみ方を卒業後も実践できるよう、体育や保健体育における指導内容の充実を図り、健康や体力の状況に応じてスポーツを継続的に行う力を育みたい。

(3) 自校の取組内容

ア 地域スポーツ活動の充実のための地域連携について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	地域のスポーツクラブとの連携 (団体名：青森県フライングディスク協会)	○

2	地域の福祉機関との連携	
3	地域の小・中学校・高等学校の部活動等との連携	
4	地域の他の特別支援学校との連携	
5	地域の町内会・老人会等との連携	
6	その他（団体名：AFAA 認定エアロビクスインストラクター、青森大学新体操部）	○

イ 地域スポーツ活動を実施する場所について

		自校が取り組む内容
1	自校の施設を開放して実施	○
2	他校の施設を活用して実施	
3	地域の施設（学校以外）を利用	
4	その他	

ウ 招へいする障害者スポーツ指導員等

	所属団体等	役職等	氏名
1	青森県フライングディスク協会	会長	白川直人
2	フリーランス	インストラクター	木村梨恵
3	青森大学新体操部	監督	中田吉光

（４）実施内容

- ・フライングディスク
- ・エアロビクス
- ・マット運動、体操

２ 事業の成果と課題

（１）自校の児童生徒の変容

フライングディスク競技の器具の整備やフライングディスク・アキュラシー競技の外部講師を招くことにより、フライングディスク・アキュラシー競技に対する生徒の興味や関心につながり休み時間に体育館でアキュラシー競技を行って遊ぶ生徒も見られ、本事業がこれまで触れ合ったことのない競技の楽しさを知ることができるようになるなど生徒がスポーツに主体的に自ら楽しく、継続的に取り組む運動習慣の定着を図る良い機会となった。

講師来校後は、生徒から「楽しかった」や「もっとやりたい」、「悔しいからもっと上手になりたい」といった発言が聞かれ、これまで体を動かすことに消極的であった生徒たちが体育館を利用できる曜日の休み時間には、教員に自分から「フライングディスクをやりたい。」と要望し、教員や友達と競争したりする様子が多く見られるようになった。技術面では、まっすぐ投げることができるようになったことでねらいを定めて投げたり、投げるときの力加減を調整しプレイする様子が少しずつ見られるようになり、成長を感じさせる技能の向上につながった。本校における本事業のねらいの一つであるスポーツに主体的に自ら楽しく取り組む運動習慣の定着の一助になったと考えられる。

(2) 地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくりに関する成果と課題

本校には、本事業実施以前は、フライングディスク競技の器具が無かった。今回、本事業実施に向けて保健体育において単元を組み、他養護学校から器具を借り受けて授業を行うことで、生徒の技能の向上が図られた。このことで、校内におけるフライングディスクの器具の整備について機運が高まり、ライオンズクラブ様からの寄贈により、本校のフライングディスクの器具の整備が完了することができた。

フライングディスクは、授業や休み時間を利用するなどし、回数を重ねるごとに興味をもって取り組む様子が伺え、興味・関心や体を動かす楽しさや喜びを味わいながらスポーツの習慣化につなげることができるようになってきたと感じている。

今後は、学校の休み時間で気軽に行えるスポーツの環境整備や、休日はどこでどんなスポーツで遊べるのか、どんなスポーツが観戦できるのかなどの情報を発信し、スポーツ活動全般の基盤づくりに努めたい。

3 今後の展望等

今後の展望としては、学習指導要領で明記されている保健体育における領域と連動することが可能な団体との交流が考えられる。継続して取り組むことで、本校生徒への障害特性の理解が年々深まることが期待され、お互いに活動の効果が見込めると考える。本校との交流を基礎として、地域を巻き込んでの活動の一つとして展開できると考える。

実施種目については、東京オリンピック・パラリンピックの開催に当たり、生徒がオリンピック・パラリンピック実施競技に興味・関心を抱いている様子が多く見られていたため、それらの競技の実施や観戦を視野に入れて計画していきたい。今年度の外部講師とスポーツ活動を通じて触れ合う中で、憧れを抱いたり、技術向上の意欲につながった様子も見られたため、実際にスポーツ観戦をしたり、テレビで観たりするオリンピック・パラリンピック競技に取り組むことで、スポーツに親しむ態度や生涯にわたって継続的にスポーツに取り組める態度を育むことができると考える。

(ウ) 青森若葉養護学校

1 事業計画

(1) 自校の児童生徒のスポーツに関する現状と課題

本校は病弱の特別支援学校であり、慢性疾患や精神疾患を抱えている児童生徒が在籍している。また、学校規模も小さく、学習は1人～多くて6人などと、少人数で行われることが多い。不登校傾向の生徒や、基本的な生活習慣が確立されていない生徒が多く、体力不足や意欲の低さ、他者との適切な関わり方等が課題としてあげられる。運動を行う機会が少なく、体育の時間だけが運動の機会という児童生徒もいる。その中でも運動・スポーツを意欲的に行う生徒もあり、これまでも希望者を募り、スポーツ同好会を放課後に行っている。

(2) 本事業を通して目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

本校児童生徒においては、専門的な知識を持った指導者による指導を受けながら、定期的に運動・スポーツに取り組むことで、運動・スポーツの楽しさや喜びを感じ、生涯において、地域のスポーツ大会やスポーツ教室に参加しようという気持ちを醸成することを目指す。ま

た、地域にある就労移行支援事業所と連携して実施することで、利用者の方々との交流が生まれ、身近な社会人と触れ合うことで自分の卒業後の生活をイメージしやすくなり、進路について考えを深めたり参考にしたりすることができるようになると考えられる。

(3) 自校の取組内容

ア 地域スポーツ活動の充実のための地域連携について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	地域のスポーツクラブとの連携	
2	地域の福祉機関との連携 (団体名：特定非営利活動法人 夢の里)	○
3	地域の小・中学校・高等学校の部活動等との連携	
4	地域の他の特別支援学校との連携 (学校名：)	
5	地域の町内会・老人会等との連携	
6	その他	

イ 地域スポーツ活動を実施する場所について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	自校の施設を開放して実施	○
2	他校の施設を活用して実施	
3	地域の施設（学校以外）を利用	
4	その他	

ウ 招へいする障害者スポーツ指導員等

	所属団体等	役職等	氏名
1	青森県障害者スポーツ協会副理事	上級スポーツ指導員	野澤 英二

(4) 実施内容

これまでのスポーツ同好会の活動に加えて、専門的な知識を持った指導員を招いて様々な動きのコツや基本的な運動の楽しさを味わえるようにしたい。

また、地域にある就労移行支援事業所と連携して実施することで、年齢や障害状況等の近い社会人との交流が生まれ、児童生徒が自分の進路について考える機会になったり、学校外にも繋がりがもてるようになったりすると考えられる。

2 事業の成果と課題

(1) 自校の児童生徒の変容

本校では、職員の会議等により多少の変更はあるが、原則的に毎週火曜日にスポーツ同好会を行い、専門的知識を持つ指導者にコーチに入ってもらった。また、青森県特別支援学校総合スポーツ大会・プレ大会への出場と上位入賞を目標に掲げたことで、生徒児童が自ら目的意識を持ち、フォームを改善したり、指導者に質問してより良くなろうとしたりする姿が顕著に見られるようになった。練習を重ねて大会に出場し、目標を達成した経験は成功体験の少ない本校生徒にとってとても意義のあるもので、練習すれば結果がでることを身をもって体験することができた。この経験を機に、仲間と共に取り組むことの楽しさや心強さを感じ

じることができ、その後の学校生活や余暇時間にも意欲が生まれている。

(2) 地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくりに関する成果と課題

本事業を通して、生徒はスポーツの楽しさと、スポーツが人と関わることができる手段となることを感じることもできた。また、地域にある就労移行支援事業所の利用者と一緒にスポーツを行う機会を作ったことで、今後も自校でスポーツできる場があること、卒業したあとにも参加できる場であることを知ることができた。毎週継続して行うことで、外部の方の「特別感」も薄れ、一緒に行う仲間として認識するようになった。本校生徒のみならず、参加者は卒業してからも地域の資源を利用してスポーツができるという安心感を与えられたことが、今後生涯にわたり継続的にスポーツをする基盤になると思われる。

3 今後の展望等

本校では今年度、スポーツ同好会の活動を基盤として取り組みを進めた。毎週継続して行える点においては効果的であったが、スポーツ同好会に所属していない児童生徒への働きかけが弱かったと言える。また、小学部から高等部の児童生徒が混在している中で、種目の興味関心や能力等に差が多く、実施種目の選定に苦慮した点も課題として挙げられる。そのため、来年度においては、全児童生徒を対象にし、さらに、児童生徒のニーズに応じた種目を行ったり、学部別に開催したりする工夫が必要であると考えている。

また、本校（病弱特別支援学校）にとって、出場できるスポーツ大会は「特別支援学校総合スポーツ大会」しかないため、その大会への出場をスポーツを行う動機付けの一つとして上手く活用していきたい。

(エ) 青森第一高等養護学校

1 事業計画

(1) 自校の生徒のスポーツに関する現状と課題

本校は知的障害及び肢体不自由を対象とする特別支援学校である。在学中、生徒は保健体育及び体育の授業に加え、部活動等により日常的または継続的に運動やスポーツを行う機会が確保されている。しかし、卒業後に継続して運動やスポーツに取り組んでいる生徒はごくわずかであり、習慣化されているとは言えない。また、運動に対し、積極的に取り組む生徒と消極的な生徒の二極化が見られ、生涯をとおしたスポーツという視点で考えると、継続して運動やスポーツに取り組む生徒の割合は少なくなっている状況である。

(2) 本事業をとおして目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

本事業での取組をとおして、近隣のスポーツクラブや、車いすサッカークラブ、障害者スポーツ大会種目である陸上競技に接する機会をより多く設定することが可能となることで、卒業後のスポーツ施設の利用促進につながり、運動やスポーツに親しみ生涯をとおして学び続ける姿勢を培うことにつながるのではないかと考える。さらにスポーツクラブやサッカークラブへの入会、大会への参加で終わるのではなく、場所や頻度、種目を問わず運動やスポーツに親しむことが到達点となると考える。

(3) 自校の取組内容（○をつける。）

ア 地域スポーツ活動の充実のための地域連携について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	地域のスポーツクラブとの連携 (団体名：P S Cあおもり)	○
2	地域の福祉機関との連携	
3	地域の小・中学校・高等学校の部活動等との連携	
4	地域の他の特別支援学校との連携	
5	地域の町内会・老人会等との連携	
6	その他 (青森県障害者スポーツ指導員会・青森市陸上競技協会)	○

イ 地域スポーツ活動を実施する場所について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	自校の施設を開放して実施	○
2	他校の施設を活用して実施	
3	地域の施設（学校以外）を利用 (施設名：青森県総合運動公園陸上競技場)	○
4	その他	

ウ 招へいする障害者スポーツ指導員等

	所属団体等	役職等	氏名
1	青森県障害者スポーツ指導員会 青森市陸上競技協会	上級障害者 スポーツ指導員	野澤 英二 氏
2	P S Cあおもり (電動車椅子サッカーチーム)	代表	柿崎 長潤 氏
3	P S Cあおもり (電動車椅子サッカーチーム)		白戸 駿平 氏

(4) 実施内容

陸上競技については保健体育及び体育の授業で取り上げており、加えて、部活動として障害者スポーツ大会の練習を夏季休業中に陸上競技場で行っている。これらの取組の中で、校内、校外での活動場面に障害者スポーツ指導員を招へいすることで、地域資源の活用をとおり、障害者スポーツ大会への参加を促し、地域におけるスポーツ施設の利用促進につなげる。

車いすサッカークラブについては、肢体不自由教育部に在籍している生徒を対象に、保健体育及び体育の授業の中で取り組む。卒業生が在籍している車いすサッカークラブを招へいすることで身近さを感じながら、卒業後の生活の一部、あるいは余暇として運動・スポーツの取組がつながり、生涯学習の基盤づくりとする。

2 事業の成果と課題

(1) 自校の児童生徒の変容

陸上競技では、指導者の招へいにより青森県障害者スポーツ大会に向け陸上競技に取り組んだところ、生徒たちは積極的に運動に取り組むとともに、専門的な指導が受けられたことによる技術の向上が見られた。また、そのことを実感することで、大会において結果を残す

ことを目標に運動に対してより積極的に取り組むようになった。一方、運動に対して消極的だった生徒たちは、身体の動かし方や家庭でのトレーニング方法や過ごし方を学んだことで、自らの身体や筋力、体調管理が大切であることを意識するようになった。

事業後の感想文では「来年も大会に出ます」や「来年また来ます」等継続して運動に取り組む気持ちを表す意見が見られた。

車いすサッカーでは、競技の存在は知っているものの、用具（車いすサッカー用電動車いす、車いすサッカー用ボール等）やルール、競技の特徴について知っている生徒は少なかった。用具を見たり触れたり、実際に体験したりすることで、競技そのものに興味を示す様子が見られた。また運動量が多いことから、立位の生徒（車いすに乗って体験）でも十分に満足感を得ることができた。

（２）地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくりに関する成果と課題

本事業での取組として、車いすサッカーや陸上競技、保健体育の授業におけるフライングディスク競技に接する機会を設定した。この取組においては、地域資源の活用をとおして、障害者スポーツ大会への参加を促し、地域におけるスポーツ施設の利用促進及び、卒業後の生活の一部、あるいは余暇として運動・スポーツの取組がつながり、生涯学習の基盤づくりとなるのではないかと考えている。

車いすサッカーでは、卒業生が所属している車いすサッカーチームを招へいしたことで、卒業後の余暇活動の選択肢の一つとしてとらえることができたのではないかと考える。

フライングディスクでは、保健体育の授業の中で全ての教育部で取り組んだ。アキュラシーやディスタンスなど複数の種目があることを学び、公式試合で使用する用具を使用して学習することができたことで、特別支援学校スポーツ大会や卒業後の余暇活動の選択肢の一つとしてとらえることができたのではないかと考える。

３ 今後の展望等

特別支援学校に在籍する生徒たちにとって、卒業後も地域社会とのつながりをもつことは、卒業後のＱＯＬを充実させることにつながっている。そのための選択肢の一つとして、地域のスポーツ団体を招へいし、様々な種目の外部専門家から指導を受け、体験することができた本事業は、本校生徒たちにとって大変よい学びの機会となった。

一方、課題としては上記にもいくつか述べたが、一つは日程調整の難しさにある。特に今年度は年度途中からのスタートとなったため、学校行事と先方のスケジュールを調整し、ある程度まとまった学習期間を確保するのが難しかった。二つ目は種目選択の少なさを感じた。肢体不自由の障害を有している生徒では、障害の程度に実態差が大きいため種目選択の幅が少なかった。上記に述べた課題を解決するための取組として、学校側の調整を早め早めに準備することで対応できるのではないかと考える。

（オ）青森第二高等養護学校

１ 事業計画

（１）自校の児童生徒のスポーツに関する現状と課題

本校生徒は県内全域から集まっており、６割弱の生徒は隣接する寄宿舎から通学している。

スポーツをする機会として、学校では保健体育の授業（週 3 時間）や週 1 回の部活動（運動部）、寄宿舎では余暇活動として週 2 回程度スポーツを中心とした活動を行っている。生徒全員が体を動かす機会としては保健体育の授業のみであり、普段からスポーツをしている生徒としていない生徒のスポーツへの意識や意欲の差が大きい。また、経験不足や不器用さなど様々な背景から体を動かすことに苦手意識のある生徒も多い。本校生徒は卒業後、それぞれの地元を中心とした事業所等へ就職し、社会の一員として生活していくことから、継続して働くための体力の維持・向上に加えて、健康的で充実した生活を送るためのスポーツ活動を継続できるよう支援をする必要がある。

（２）本事業をとおして目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

保健体育の授業だけでなく本事業の取組をとおして、本校全生徒が体を動かすことで爽快感や充実感を味わう機会を増やし、スポーツに親しむ基盤をつくる。最終的には、生徒が卒業後の余暇活動の一つとして、自分のペースで日常的に体を動かすこと、企業や地域のスポーツ同好会等への参加、さらには、それぞれの地元や近隣にあるフィットネスクラブ等の利用など、何らかの形でスポーツを生活の中に取り込む態度や意欲の育成につなげていきたい。

（３）自校の取組内容

ア 地域スポーツ活動の充実のための地域連携について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	地域のスポーツクラブとの連携	
2	地域の福祉機関との連携 (団体名：青森県身体障害者福祉センターねむのき会館)	○
3	地域の小・中学校・高等学校の部活動等との連携	
4	地域の他の特別支援学校との連携	
5	地域の町内会・老人会等との連携	
6	その他 (エアロビクスインストラクターとの連携)	○

イ 地域スポーツ活動を実施する場所について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	自校の施設を開放して実施	○
2	他校の施設を活用して実施	
3	地域の施設（学校以外）を利用	
4	その他	

ウ. 招へいする障害者スポーツ指導員等

	所属団体等	役職等	氏名
1	フリーランス	健康運動指導士 JWI 認定エアロビクス インストラクター	木村 梨恵 氏
2	青森県障害者フライングディスク 協会	顧問 公認審判員	福沢 和彦 氏 小山内 敬子 氏

（４）実施内容

ア 障害者スポーツ指導員 2 名を年 3 回招き、本校全生徒を対象として保健体育の時間にフライングディスク競技を指導していただく。運動経験の差に関係なく気軽に体を動かす楽しさを味わうとともに、青森県特別支援学校総合スポーツ大会・プレ大会で実施するフライングディスク競技についての理解を深める。

イ エアロビクスインストラクター木村氏を年 4 回招き、本校全生徒を対象として保健体育の時間に、エアロビクス教室を実施する。運動経験の差に関係なく、楽しく体を動かす活動を通して爽快感を味わうとともに、全体的な体力の向上を目指す。また、この経験が卒業後の余暇活動として、県内各地にあるフィットネスクラブ等に足を運ぶきっかけの一つとなることを期待したい。

2 事業の成果と課題

(1) 自校の児童生徒の変容

本校生徒の課題から、運動経験の差に関係なく体を動かすことの楽しさを味わうことができる内容を設定し、全校生徒を対象として本事業に取り組んだ。その結果、講師の方々の親切かつ丁寧な指導のおかげで、体を動かすことに苦手意識がある生徒もできることが増え、活動中に自然に笑顔が出るなど、みんなと一緒に楽しんでいる様子が見られた。また、運動が得意な生徒も、基礎基本から学んだことで正しい技術を身につけることができたり、講師の動きをよく見て試行錯誤しながら体を動かしている姿が見られたりした。実施後の生徒の感想から、体を動かすことが楽しい、またやりたい、という生徒が非常に多く、さらに休日などの余暇活動として、ウォーキングなどの軽い運動やスポーツなどで体を動かしてみたいと考えている生徒も多く見られるようになった。

(2) 地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくりに関する成果と課題

本事業をとおして、多くの生徒がスポーツに親しみ、体を動かすことの楽しさや爽快感を味わうことができた。その結果、多くの生徒は日常的に体を動かしてみたいという意識に変化してきている。特に、卒業を控えた 3 学年では、総合的な学習の時間で行っているフィールドワークにおいて、複数のグループが地域にあるフィットネスクラブやカルチャースクール（ダンス、ヨガ等）について調べるなど、卒業後の利用に興味を示している生徒が多く見られた。このことから、本事業をとおして、卒業後の余暇活動の一つとして、何らかの形でスポーツを生活の中に取り込もうとする意欲が向上してきたのではないかと考える。

課題としては、卒業後、生徒の出身地域で活用できるスポーツ関連の資源についての情報収集及び情報提供をしていく必要があること、生涯学習の基盤づくりとして、学校でのスポーツ活動等の場をさらに広げていくことが挙げられる。

3 今後の展望等

今年度の取組の成果と課題を踏まえ、今後必要であると思われる取組として次の 3 点を挙げる。

○体を動かすことを苦手としている生徒への取組

比較的簡単に、楽しく体を動かすことができる内容を検討し、全員が参加する保健体育の授業を活用して実施する。これにより、体を動かすことに苦手意識のある生徒に、少しでも体を動かす楽しさや爽快感を味わってもらい、将来の生活につなげていきたい。

○活動の場のさらなる充実

もっと体を動かしたい、という生徒も多いため、現在週1回行っている部活動を、各部や生徒の実態等に応じて活動日を柔軟に設定できるようにし、部活動を活性化させる。また、可能であれば、部活動に定期的に外部講師を招いてより専門的な指導を受け、生徒はもちろん、本校職員の指導力向上にもつなげる。これにより、特別支援学校総合スポーツ大会や障害者スポーツ大会の上位入賞を目指すとともに、卒業後も競技を続けたい、スポーツをしたい、という意欲につながっていくことを期待したい。

(カ) 弘前第一養護学校

1 事業計画

(1) 自校の児童生徒のスポーツに関する現状と課題

本校におけるスポーツ活動の取り組みは、体育の授業や運動会（小・中学部）、スポーツ大会（高等部）などが中心である。児童生徒の発達の段階、運動能力をもとに指導計画を作成し、指導している。一方、地域におけるスポーツ活動については、参加している児童生徒はほとんどいないのが現状である。児童生徒の実態に合ったスポーツ環境や専門の指導者が少なく、地域のスポーツ団体等との連携・交流が難しい。課題としては、高等部卒業後、継続的にスポーツ活動に参加する生徒が少ないことがあげられる。

(2) 本事業をとおして目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

地域において、生徒の実態に合ったスポーツ環境や専門の指導者が少ないという課題を踏まえ、本事業を通して、スポーツ活動における本校生徒の実態を、地域に理解していただく機会としたい。本校生徒の実態を知っていただくことで、参加できるスポーツ活動、参加が難しいスポーツ活動、配慮すれば参加できるスポーツ活動などの理解が促進されるのではないかと考える。また、地域とのスポーツ活動が充実し、本校生徒への理解が進むことで、新たに地域のスポーツ環境が整備され、卒業後も生徒が地域においてスポーツ活動を継続し、生涯にわたって参加できるようになるのではないかと考える。

(3) 自校の取組内容（○をつける。）

ア 域スポーツ活動の充実のための地域連携について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	地域のスポーツクラブとの連携	
2	地域の福祉機関との連携 (団体名：社会福祉法人七峰会（拓心館）)	○
3	地域の小・中学校・高等学校の部活動等との連携	
4	地域の他の特別支援学校との連携	
5	地域の町内会・老人会等との連携 (団体名：駒越町会及び熊嶋町会)	○
6	その他	

イ 地域スポーツ活動を実施する場所について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	自校の施設を開放して実施	○

2	他校の施設を活用して実施	
3	地域の施設（学校以外）を利用	
4	その他	

ウ 招へいする障害者スポーツ指導員等

	所属団体等	役職等	氏名
1	青森県障害者フライングディスク協会	会 長	齊 藤 誠
2	(株)リベロススポーツクラブ	コーチ	佐 藤 峻
3	NPO スポネット弘前	理事長	鹿 内 葵 ほか

(4) 実施内容

高等部普通学級の体育Ⅱ・体育Ⅲの授業を活用し、本校高等部の生徒に加え、地域の障害者福祉施設である拓心館グループ利用者、地域の駒越地区、熊嶋地区の地域住民の参加を得て、外部講師を招へいしての障害者スポーツの技術向上を図る。年間7回の実施とする。

実施競技種目は体育で計画されているもの及び障害者スポーツとして広く大会等が開催されているものとし、体育館内でも実施できるフライングディスク、ボッチャ、サッカー、バスケットボール、ソフトバレーボールを競技種目とした。開催日時は以下のとおりとした。

	種目	開催日時	備考
1	フライングディスク	令和元年10月31日(木)	連携対象：福祉施設 体育Ⅲ授業内(前後半で種目入替)
	サッカー(フットサル含)	12:50～14:30	
2	フライングディスク	令和元年11月1日(金) 12:50～14:30	連携対象：地域住民・福祉施設 体育Ⅱ授業内
3	サッカー(フットサル含)	令和元年11月7日(木)	連携対象：福祉施設 体育Ⅲ授業内(前後半で種目入替)
	バスケットボール	12:50～14:30	
4	フライングディスク	令和元年11月8日(金) 12:50～14:30	連携対象：地域住民・福祉施設 体育Ⅱ授業内
5	ボッチャ	令和元年12月13日(金) 12:50～14:30	連携対象：地域住民・福祉施設 体育Ⅱ授業内
6	バスケットボール	令和元年12月19日(木)	連携対象：福祉施設 体育Ⅲ授業内(前後半で種目入替)
	ソフトバレーボール	12:50～14:30	
7	ボッチャ	令和元年12月20日(金) 12:50～14:30	連携対象：地域住民・福祉施設 体育Ⅱ授業内

2 事業の成果と課題

(1) 自校の児童生徒の変容

今回、外部講師による障害者スポーツを体育の授業内で行ったことで、本校生徒の体力や運動能力、知識や理解等の実態に合わせ、楽しく取り組みやすいプログラムで実施することができた。更に、専門的な競技知識を持った方からの指導により、これまであまり体育や運動を好まず活発に活動していなかった生徒が、明るく元気にしかも意欲的に取り組む姿が多く見られ、技術の向上は目覚ましかった。

また、通常の体育授業内に組み込んだ活動ではあったが、その中に地域の障害者福祉施設

利用者や地域住民が、生徒と一緒に活動したことにより、これまで自分勝手な行動が多く、体育の目標を十分に達成できていなかった生徒でも、共に楽しむことができ活発に活動していたことから、地域交流の効果は非常に大きかったと考える。

(2) 地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくりに関する成果

地域の障害者福祉施設や住民を巻き込んでのスポーツ教室では、スポーツ活動における本校生徒の実態を地域に理解していただく機会とすることができ、参加できるスポーツ活動や参加が難しいスポーツ活動、配慮すれば参加できるスポーツ活動などの理解を促進することができたと考える。

3 今後の展望等

本校ではこれまで、外部講師を招へいしての講習会を数多く実施してきてはいるが、今回のような地域住民や障害者福祉施設の方々と一緒に活動は初めてであり、計画段階で参加者が集まるのかなど数多くの不安があった。

しかしながら、フライングディスクやボッチャ種目には地域住民が 15 名ほど参加して成功裏に終わることができたとともに、近隣の障害者福祉施設からは全種目に毎回参加していただいたことにより、本校生徒にも通常の体育授業とは違った活発な活動が見られた。

今後とも継続して実施していくことで、地域での本校の活動や障害者スポーツの理解と普及につなげることができるとともに、本校生徒がこれまで以上に障害者スポーツに親しみ活発な活動をすることができると思われる。

(キ) 弘前第二養護学校

1 事業計画

(1) 自校の児童生徒のスポーツに関する現状と課題

本校は肢体不自由がある児童生徒を対象とする全児童生徒数 21 名の小規模な特別支援学校である。体育の時間や自立活動の時間に、体を動かす機会はあるものの、それ以外は体を動かしたり、スポーツに参加したりする経験は少ない。

放課後等デイサービスなどにおいても、スポーツに親しむ機会は少なく、卒業後も機会や場所が少ないのが現状である。

(2) 本事業をとおして目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

ア 地域のスポーツ指導員を学校に招き、指導を受けることによってスポーツのスキル向上を目指すとともに、地域のスポーツクラブ等への参加意欲を高めていきたい。

イ 本校を拠点として、近隣の障害者福祉施設の利用者（本校卒業生も含む）や、町内会の方を学校に招いて障害者スポーツに取り組むことによって、地域とのつながりを増やすとともに、生涯にわたってスポーツに取り組む基盤を作っていきたい。

ウ 本校保護者に対して障害者スポーツ活動への参加を呼びかけ、児童生徒の生涯にわたってスポーツに親しむための環境や基盤を作っていきたい。

(3) 自校の取組内容

ア 地域スポーツ活動の充実のための地域連携について

(ア) 地域のスポーツクラブとの連携

団 体 名：青森県ボッチャ協会、青森県障害者フライングディスク協会

取組内容：ボッチャ・フライングディスク学習会

(イ) 地域の福祉機関との連携

団 体 名：山郷館、さわらび療育福祉センター

取組内容：ボッチャ・フライングディスク交流会

(ウ) 地域の町内会・老人会等との連携

団 体 名：弥生町内会、サンアップルグループホーム

取組内容：ボッチャ交流会

イ 地域スポーツ活動を実施する場所について

場 所：自校の施設を開放して実施

取組内容：近隣の障害者福祉施設や町内会の方を招いてのボッチャ・フライングディスク交流会の実施

ウ 招へいする障害者スポーツ指導員等

氏 名：櫛引 宏一 氏

所属団体等：青森県ボッチャ協会理事、青森県障害者フライングディスク協会監事

(4) 実施内容

ア 指導員を招へいしてのスポーツ学習会、スポーツ交流会での全体指導実施

全 8 回：ボッチャ学習会 3 回、フライングディスク学習会 2 回、スポーツ交流会 2 回

イ 青森県特別支援学校総合スポーツ大会・プレ大会参加

中学部・高等部生徒：全 9 名、小学部児童：見学 4 名

ウ 地域の福祉機関、町内会・老人ホームとのスポーツ交流会実施

山郷館、さわらび療育福祉センター、弥生町内会、サンアップルグループホーム

2 事業の成果と課題

(1) 自校の児童生徒の変容

本事業によってスポーツに取り組む機会が増えたこと、地域のスポーツ指導員からの指導を受けることができたことはとても良い経験となっている。

ボッチャでは、ボールの握り方や投げる角度について教えてもらったことで、得点的への安定した投球ができるようになった児童生徒がいるほか、フライングディスクでは、ディスクの握り方や回転のかけ方のバリエーションについて教えてもらったことで、アンダーローでアキュラシーゴール内を通過させることができるようになった児童生徒がいる。

ボッチャやフライングディスクで、道具をうまく操作できたときには嬉しそうな笑顔を見せるなど、児童生徒が達成感をもつことができた様子が見られている。日常生活においても地域のスポーツクラブ等へ参加したいという意欲を高めていけるよう、今後も学校においてスポーツの成功体験を増やしていきたい。

(2) 地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくりに関する成果と課題

本事業を通じて、本校の体育館を会場にして地域の障害者福祉施設や町内会・老人ホームとのボッチャやフライングディスクを介したスポーツ交流会を行うことができたことはとても良い経験となった。障害者スポーツの地域の拠点として、今後も環境を整備し、スポーツに親しむ機会を増やしていくとともに、スポーツ用具を地域において活用してもらうなどし

て障害者スポーツの普及啓発を図っていききたい。また今回の交流でつながりが深まったことで、今後さらに充実した地域スポーツ活動を進めていくための素地ができたと考えている。

そのほか、外部講師として招いた櫛引宏一氏が、弘前市身体障害者福祉センターで毎週土曜日に障害者スポーツ指導を行っているという情報も得ることができ、さわらび療育福祉センターと情報共有することができたことは成果の一つと思われる。身近な場所に継続的にスポーツができる環境があることを児童生徒や保護者、卒業生、地域にも伝えていきたい。

3 今後の展望等

本事業をとおして目指した「地域スポーツ活動の充実」については一定の成果があったため、今後も地域のスポーツ指導員を学校に招き、指導を受けることや、スポーツのスキル向上を目指すことを継続して取り組んでいきたい。

一方、「基盤づくり」については、これまで以上に本校保護者に対して障害者スポーツ活動への参加を呼びかけ、児童生徒の生涯にわたってスポーツに親しむための環境や基盤を作っていきたい。そのため、特別支援学校総合スポーツ大会に向けての取組など、頑張っている様子を保護者にお知らせするとともに、可能であれば保護者にも参加を呼び掛けていきたい。また、弘前大学の学生ボランティアの活用や、弘前大学附属特別支援学校でのスポーツ大会への参加など、さらに広がりやつながりを作っていきたいと考えている。

(ク) 八戸第一養護学校

1 事業計画

(1) 自校の児童生徒のスポーツに関する現状と課題

体育等でボッチャやカローリング等スポーツに触れる機会が多く、運動会においては、アダブテッド・スポーツの内容を取り入れた競技を行うことも多い。また、各学部の学校間交流においても児童生徒の状況に合わせて、健常者とスポーツに親しむ機会も設けている。この2年は、ボッチャ甲子園に出場しており、今年度も出場することになっている。これまで、出場選手を対象に課外活動としての取り組みが行われてきている。今後更に部活動としての活動の場を設けるなど、卒後の余暇活動の充実に向け取り組む必要がある。

(2) 本事業をとおして目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

この事業をきっかけに、体育の授業の充実や部活動としての競技的・教育的側面を踏まえた活動の場を設定していきたい。今回依頼する専門家の力を得ながら、本校における部活動の組織が安定的かつ継続的に行われるための体制を整備し、肢体不自由等で身体の動きに制限のある児童生徒が生涯にわたり、充実した生活ができる大切な要素となるように取り組む必要があると考えている。また、本事業後もこの取り組みを続け、数年後高等部卒業生関係の施設や事業所等とのスポーツを通して交流する機会を設けることによって、各種大会との連携を深め、児童生徒の余暇活動の充実を図っていききたい。

(3) 自校の取組内容

ア 地域スポーツ活動の充実のための地域連携について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	地域のスポーツクラブとの連携	○

	(団体名：Hachinohe Club)	
2	地域の福祉機関との連携	
3	地域の小・中学校・高等学校の部活動等との連携	
4	地域の他の特別支援学校との連携	
5	地域の町内会・老人会等との連携	
6	その他	

イ 地域スポーツ活動を実施する場所について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	自校の施設を開放して実施	○
2	他校の施設を活用して実施	
3	地域の施設（学校以外）を利用	
4	その他	

ウ 招へいする障害者スポーツ指導員等

	所属団体等	役職等	氏名
1	Hachinohe Club アダプテッド部門	代 表	古舘 幸治

(4) 実施内容

- アダプテッド・スポーツ（ボッチャ）の楽しみ方や課外活動の充実
- ・アダプテッド・スポーツ（ボッチャ）の楽しみ方を深めることができるように道具や支援を理解する機会の設定
- ・アダプテッド・スポーツ（ボッチャ）の部活動としての取り組み

2 事業の成果と課題

(1) 自校の児童生徒の変容

ボッチャのボールの投げ方や投げる時の姿勢や方向を確認してもらうことで、基本的な技術を習得することができた。また、練習方法についても、距離感をつかむ練習等とても分かりやすく、生徒自身が上達していることが実感でき、意欲的な場面が多く見られるようになった。これまで数回指導を受けている中学部の生徒についても、ボッチャボールの投球技術を習得できるようになってきている。今後も、継続して指導を受けることにより、大会（青森県特別支援学校総合スポーツ大会）に出場し活躍できるのではと考えられるまでになってきている。これまでの取り組みにより、生徒たちが最初の自分の状況から、指導を受け上達した状況を理解し、主体的に取り組む姿が見られた。また、必要な技術を知ることができたことで、目標をもって取り組む気持ちが備わってきていると考えられる。

(2) 地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくりに関する成果と課題

今回の事業でボッチャに取り組むことにより、これまでボッチャ選抜甲子園に出場する選手に対するあこがれの気持ちを抱いていただけた児童・生徒にとって、より身近な種目になったと考えられる。また、体育館の床改修に伴いボッチャコート2面のラインを引くことができ、活動充実のための基盤づくりにもつながった。講師の勤務先でもある介護老人福祉施設の職員からも、本校の整備された体育館と生徒の活動の様子を見学したいと申し出があるなど、本校が今後の活動に向け拠点となる可能性がある。

本校生徒においては、講師の主催する Hachinohe Club のボッチャ教室に参加した生徒や参加したいと情報提供を求める生徒が出る等、卒業後の生活の充実に向け講師主催の団体とよい関係を築くことができた。参加した生徒は、とても充実した活動ができたと感想を述べており、今後も関係性を保っていくことで、生涯にわたり充実した生活を送るための要素として大切な足掛かりとなったと考えられる。

今後の課題として、他施設との対外的な活動の場を設定することで、地域とつながるという大切なところを補うことができると考えている。

3 今後の展望等

来年度も、今年度依頼した講師と関係を継続しながら、授業充実のための機会を設定しつつ、青森県特別支援学校総合スポーツ大会等に出場する生徒が目標を持って出場できるような活動の充実を図りたい。また、講師の主催する Hachinohe Club のボッチャ教室への参加者が増えてきたことから、在学中から卒業後と繋がるような活動の場ができるように関係を深めていきたい。最後に古舘氏の勤務している老人介護施設から、ボッチャで交流したいと申し出があったことから、拠点施設としての役割や地域施設との交流という場を設定していきたい。

(ケ) 八戸第二養護学校

1 事業計画

(1) 自校の児童生徒のスポーツに関する現状と課題

本校は、知的障害を有する児童生徒が在籍する特別支援学校である。本校中学部生徒は70名で、約9割の生徒が、スポーツが好きであると答えている。一部の生徒はスポーツに関心が高いものの、学校以外で継続的に取り組んだり、スポーツに触れたりする機会が少なく、放課後の福祉施設でのレクリエーションや家庭での散歩にとどまっている。また、肥満の生徒が多いことも学校課題の一つとなっている。

(2) 本事業をとおして目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

昨年度生徒にアンケートをとった結果、サッカーへの関心が一番高かった。しかし、地域のスポーツチームへの関心は見られるものの、実際にスポーツに触れる機会や、ゲームを観戦するような機会は少ないことが分かった。そこで、一番関心が高かったサッカーを取り上げ、地域のスポーツチームの選手と関わりをもつことで、スポーツへの意欲・関心を高め、地域総合型スポーツクラブの指導員との触れ合いを通して、信頼関係を築いた上で、地域のスポーツ活動への参加につなげていきたい。また、青森県障害者スポーツ大会にフライングディスクで参加する生徒が数名いることから、障害者スポーツ指導員によるスポーツ活動を実施し、授業等でも取組み、県の大会や青森県障害者スポーツ大会参加へとつなげていきたい。

(3) 自校の取組内容

ア 地域スポーツ活動の充実のための地域連携について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	地域のスポーツクラブとの連携 (団体名:地域総合型スポーツクラブ Hachinohe Club)	○

2	地域の福祉機関との連携	
3	地域の小・中学校・高等学校の部活動等との連携	
4	地域の他の特別支援学校との連携	
5	地域の町内会・老人会等との連携	
6	その他	

イ 地域スポーツ活動を実施する場所について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	自校の施設を開放して実施	○
2	他校の施設を活用して実施	
3	地域の施設（学校以外）を利用	
4	その他	

ウ 招へいする障害者スポーツ指導員等

	所属団体等	役職等	氏名
1	(株) ヴァンラーレ八戸	選手 日本サッカー協会 C 級コーチライセンス	金井 隆太他数名
2	青森県障害者スポーツ協会 社会福祉法人海陽会 身体障害者 授産施設あすなろクリーナース	障害者スポーツ指 導員 所長	福沢 和彦
3	地域総合型スポーツクラブ Hachinohe Club	日本スポーツ協会 公認スポーツ指導 員	山之内 悠
4	地域総合型スポーツクラブ Hachinohe Club	障害者スポーツ指 導員	古舘 幸治

(4) 実施内容

地域総合型スポーツクラブ Hachinohe Club によるサッカー、ボッチャ等の体験をととして、スポーツに親しみ、身体を動かす楽しさを知る機会とする。休日にスポーツクラブの活動に参加する機会へとつなげていく。また、ヴァンラーレ八戸によるサッカー体験をととして、スポーツの楽しさだけでなく、余暇に試合を見に行くことや応援など、生活の中でスポーツへの関心を高める機会にもしたい。

さらに、障害者スポーツ指導員によるフライングディスク体験をととして、技術や基礎を学び、障害者スポーツの魅力と楽しさを感じる機会とする。授業等で取り組んだ成果を、県の大会や特別支援学校スポーツ大会で発揮するなどし、生涯に渡り楽しめる競技としたい。

	日 時	実 施 内 容
1	7/5 (金) 12:30~14:30	Hachinohe Club① (ボッチャ)
2	7/12 (金) 12:30~14:30	ヴァンラーレ八戸

3	7/18 (木) 12:30～14:30	Hachinohe Club② (ボッチャ)
4	8/23 (金) 12:30～14:30	障害者スポーツ指導員① (フライングディスク：福沢)
5	9/5 (木) 12:30～14:30	障害者スポーツ指導員② (フライングディスク：福沢)
6	10/4 (金)	青森県特別支援学校スポーツ大会・プレ大会

2 事業の成果と課題

(1) 自校の児童生徒の変容

本事業を通じて、外部講師による障害者スポーツ体験をすることにより、自分から休み時間に友達を誘ってサッカーをするなど、身体を動かすようになったり、意欲的に保健体育の授業に取り組んだりするようになった。講師からボッチャの簡単なルールやフライングディスクの投げ方を教えていただき、保健体育の授業の中で繰り返し取り組むことで、実態に差がある生徒が、一堂に会してスポーツを楽しむことができるようになってきた。また、成功を喜びあったり、友達を応援したり、友達の良さを認め合うようになった。学校間交流の場などでも、自分から積極的にスポーツに取り組む姿が見られるようになり、他校の生徒と共に物怖じすることなく、ときにはやり方を見本として見せたり、説明したりして、一緒に楽しむことができるようになった。事業を通してスポーツに取り組み、繰り返してきたことで、技術も上達し、順番を守ったり、自信をもって取り組んだりするようになった。

課題としては、生徒の人数が多いため、安全面も考慮し、一斉に行うことが難しいことが挙げられる。実態に合わせて保健体育のグループに分かれて、実施した。今後も、実態に合わせたグループ編成と場所の検討が必要である。

(2) 地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくりに関する成果と課題

今年度は、県の障害者スポーツ大会へ5名、地域のマラソン大会へ2名参加することができた。

地域総合型スポーツクラブ Hachinohe Club のスポーツ体験教室として、本校体育館において、7月7日(日)に実施した。本校からは、12名の児童生徒が体験活動に参加し、クラブの会員と職員、高校生ボランティアなどと1時間程度楽しく身体を動かすことができた。また、その後地域の体育館で月2回、1時間程度活動している同クラブに2名の体験者があり、現在では、本校より9名入会し、活動している。

地域のサッカーチームとのサッカー体験後、中学部でダイハツスタジアムを見学、ヴァンラーレ八戸の練習見学を実施した。初めて見るスタジアムの広さ、選手が出すパスの速さに生徒は驚き、歓声を上げていた。この経験から、ヴァンラーレ八戸の試合があると、勝敗を話題にする生徒も出てきた。また、ゲームを観戦する機会が少ないことを聞いて、ヴァンラーレ八戸さんが本校の児童生徒に招待券を用意してくださり、ホームゲームの試合をたくさんの児童生徒が観戦することができた。

3 今後の展望等

今年度障害者スポーツに初めて取り組むことで、生徒がスポーツに関心をもったり、意欲的

に取り組んだりするようになった。来年度は、小学部の高学年など、早い段階から外部講師による障害者スポーツ体験を実施し、障害者スポーツに親しむ環境をつくり、青森県特別支援学校スポーツ大会等への参加につなげていきたい。また、競技に参加するに当たり、挨拶や礼儀なども取り組んでいきたい。

(コ) 八戸高等支援学校

1 事業計画

(1) 自校の生徒のスポーツに関する現状と課題

スポーツへの興味や関心が高く意欲的な生徒がおり、県障害者スポーツ大会には陸上競技や卓球競技を中心に多数の生徒が出場した。そのうち数名の生徒は全国障害者スポーツ大会に出場し、メダルを獲得している。また、近隣の高等学校やスポーツクラブと行われる交流会に参加し様々なスポーツを経験するなど、各々が好みのスポーツに親しむ様子が見られる。

(2) 本事業をとおして目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

近隣高校の施設を借用し部活動と合同練習を行うことで、スポーツに取り組める場所を確保するとともに、地域の高校生と交流する機会を設ける。また、自校でも2～3種類のスポーツで練習会を定期的実施する。その際、スポーツ指導員や近隣学校の指導者を招き指導を仰ぐこととする。

(3) 自校の取組内容

地域のスポーツ活動との連携をねらい、近隣学校に指導者の派遣を依頼する。また、高等学校の施設を借用し、必要に応じて合同練習を行う。

(3) 実施内容

青森県障害者スポーツ大会に向けた練習（陸上競技、卓球競技）をとおして取り組むこととする。陸上競技では、八戸学院大学陸上競技部監督の綿谷貴志氏を定期的に招き、技術指導を依頼する。

2 事業の成果と課題

(1) 自校の生徒の変容

主体的にスポーツに親しむことや競技力の向上をねらい、陸上競技、卓球競技、フライングディスク競技の練習日を設定した。これらの競技は青森県障害者スポーツ大会の実施種目であり、今回の参加者は上記大会への出場を目指している生徒であった。本校教員を主な指導者として、6～9月の放課後及び夏季休業期間中に週2回、1回2～3時間程度の練習を行った。練習に参加した多くの生徒が継続して取り組み、大会に出場することができた。本校が重点的に取り組んでいる陸上競技においては、大会後も練習日を月1回設定したところ、大会出場者のおよそ6割がこの練習にも参加した。また、昼休みにスキルトレーニングをしたり、友人を誘って卓球をしたりする様子が見られた。このことから、自らスポーツに取り組もうとする姿勢が養われつつあると考える。

青森県特別支援学校総合スポーツ大会プレ大会に参加した産業科1、2年生に行ったアンケート調査では、約6割の生徒が「競技への参加を楽しみにしていた」「今後もスポーツを続けたい」と回答した。元より保健体育の授業に積極的に取り組む生徒たちではあるが、大会参

加がスポーツに親しむきっかけや継続する動機になり得るものであると考えられる。

(2) 地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくりに関する成果と課題

練習日を設定したことで、生徒にとって最も身近な存在である学校でスポーツに親しむ場所や機会を確保し提供することができた。そして、近隣学校の指導者を招くことで、普段とは異なる指導を受ける機会を設けることもできた。一方、現状では生徒が卒業した後のスポーツ活動の機会の確保には至っていない。卒業後もスポーツを継続できる環境の整備が必要であるとする。また、学校が中心となることにより、教員の業務負担の増加が懸念されることから、実施規模や指導者の確保といったことも課題として挙げられる。

今年度、近隣高校の施設を借用しての練習は行わなかった。理由として、本校の施設で十分な練習を行うことができたこと、卓球競技では本校生徒と高校生との技術力の差から継続して取り組むことへの意欲の低下が懸念されたため、合同練習が困難であると判断したこと、の2点が挙げられる。令和2年度以降、本校の設備で十分な練習ができない場合には、公共施設の利用を検討する。また、卓球競技においても地域の指導者を招くなど生徒が意欲的に参加できる環境を整える必要があるとする。

3 今後の展望等

県障害者スポーツ大会に向けた練習日及び外部指導者による練習会を設定し、生徒が継続してスポーツに取り組める機会を提供していく。特定の教員に負担が集中しないよう、複数教員の協力を得ながら実施することとする。また、卒業生が練習参加を希望する場合には、負傷した際の対応等を明確にした上で受け入れる。

陸上競技をとおした地域スポーツとの連携及び交流は、生徒がスポーツに親しむ機会や意欲的に取り組める環境を確保するために効果的であったとする。令和2年度以降も陸上競技を中心に卓球競技等その他の競技においても地域の指導者を招き、指導を受ける機会を設定する。

(サ) 森田養護学校

1 事業計画

(1) 自校の児童生徒のスポーツに関する現状と課題

児童生徒の継続した運動の取組として、全児童生徒が朝マラソンを行い、運動習慣や体力の向上を図っている。そのほか体育・保健体育でボッチャ、フライングディスクやカラーリングを実施しているが、教育活動以外でのスポーツ活動にはつながっていない。地域のスポーツクラブやスイミングなどに参加している児童生徒はほとんどない。また、地域が主催するスポーツ交流に参加している生徒も少なく卒業後にスポーツに親しむ機会は少ないのが課題である。

(2) 本事業をとおして目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

児童生徒が地域と連携したスポーツ活動に参加できるよう、青森県ウォーキング協会加盟団体「つがる市ウォーキングの会」の協力を得て、児童生徒の実態や能力に合わせたウォーキング技術を向上させるとともに、地域で開かれるウォーキングイベントへの参加を目指す。

ルールや技術を楽しむスポーツとして、体育科の授業でボッチャ、フライングディスクなどを行うときに、障害者スポーツ指導員を招き、児童生徒の実態、能力に応じた技術の向上

を目指すとともに、大会等への参加をととしてスポーツの楽しさを味わい、スポーツに親しむことを目指す。

(3) 自校の取組内容 (○をつける。)

ア 地域スポーツ活動の充実のための地域連携について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	地域のスポーツクラブとの連携	
2	地域の福祉機関との連携	
3	地域の小・中学校・高等学校の部活動等との連携	
4	地域の他の特別支援学校との連携	
5	地域の町内会・老人会等との連携	
6	その他 (つがる市ウォーキング協会との連携)	○

イ 地域スポーツ活動を実施する場所について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	自校の施設を開放して実施	○
2	他校の施設を活用して実施	
3	地域の施設(学校以外)を利用	
4	その他	

ウ 招へいする障害者スポーツ指導員等

	所属団体等	役職等	氏名
1	つがる市ウォーキングの会	県理事	小田原良三、澁谷晴昭、松橋静枝
2	Athletic Club 弘前	コーチ	丸谷壮
3	障害者スポーツ指導者	指導員	船橋渡、櫛引宏一
4	S A J クロスカントリースキー	指導員	斉藤秀美、木田康雄

(4) 実施内容

青森県ウォーキング協会加盟団体「つがる市ウォーキングの会」から講師を招き、ウォーキングの心得や歩き方等の指導を受ける。ウォーキングイベント「おやこウォーク in 地球村」のコースで児童生徒の実態や歩行能力に応じて歩行練習を行う。また、地域住民や保護者と一緒に歩く機会を設定し、家庭でのウォーキングや地域のウォーキングイベントへの参加へつなげていく。

ルールや技術を楽しむスポーツとしてボッチャ、フライングディスクなど体育科授業に、障害者スポーツ指導員を招き、児童生徒の実態、能力に応じた技術の向上を目指すとともに、障害者スポーツ大会や特別支援学校スポーツ大会への出場を目標にスポーツの楽しさを味わい、スポーツに親しむ。

2 事業の成果と課題

(1) 自校の児童生徒の変容

全ての児童生徒が実態に応じて地域と連携したスポーツ活動に参加できることを目指し、ウォーキングに取り組んだ。全校児童生徒を縦割りにして全校ウォーキングを実施したとこ

ろ、高等部生徒が小学部児童を見守りながら歩いたり、学部を超えて、楽しく話をしたりしながら歩く姿が多く見られた。小学部では、同じコースを歩く練習をし、距離が長いコースにチャレンジするなど、積極的に校外歩行を実施していた。実際に、歩く距離が伸び、速度が速くなってきている。

中学部では、体育の授業で、サッカークラブチームのコーチである講師から指導を受け、ボールを蹴る、止めるなどのサッカーの基本動作からミニゲームまで実施した。技術面での向上が見られ、生徒全員がゲームを楽しむことができた。

高等部では、地域の障害者スポーツ指導員等を招き、体育の授業でボッチャ、フライングディスク、バスケットボール、ノルディックスキーを実施した。生徒が新鮮さや専門性を感じるとともに、スポーツの楽しさや喜びを味わうことができる授業であった。

(2) 地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくりに関する成果と課題

近隣地域は、ウォーキングが盛んな地域で、いくつものウォーキングの会が存在し、ウォーキングイベントも多い。つがる市ウォーキングの会の方たちから、次回もぜひ一緒に歩きたいという声が聞かれた。会員の方たちが、本校児童生徒を覚えてくれることで、地域のウォーキングイベントに参加しやすくなると考える。また、今回、保護者の協力が多数あったことは、保護者が会員の方たちと顔見知りになり、家族でウォーキングイベントに参加するきっかけになると思われた。

しかしながら、地域のスポーツイベントに参加している児童生徒がほとんどいないのが現状であり、課題でもある。今後、保護者に対して、開催されるスポーツイベントの情報提供を積極的に行うことは、本人も含め家族で地域スポーツ活動への参加につながる方法の一つと考える。本校児童生徒が家族で参加し、参加者が増えていけば、地域スポーツ活動が今より充実していくのではないかとと思われる。

3 今後の展望等

今年度の実施で、児童生徒の実態や能力に合わせたスポーツ種目の選定、実施時期、実施内容など、継続実施するための多くの知見、情報を得ることができた。この地域には、トレーニングマシンを備えた体力測定ができる健康づくりセンター、ウォーキングクラブ、ノルディックスキークラブなど年間をとおして、本校児童生徒が継続的にスポーツに取り組める環境があることが分かった。この地域資源を、教育活動内外で、積極的に使っていくように仕掛けていきたい。

また、講師を招いた体育科の授業は、生徒にとって新鮮でかつ専門的な技術を学べる有意義な時間であった。来年度は、全学部で、外部の専門家を活用した授業を実施し、教員の授業力向上にもつなげていきたい。

(シ) 黒石養護学校

1 事業計画

(1) 自校の児童生徒のスポーツに関する現状と課題

本校では、放課後等の部活動は実施していない。また、地域のスポーツクラブに所属したり自らや家庭内で自主的に計画したりするなど、定期的に活動している児童生徒もほとんど

見られない。運動できる施設についても、市や町の中心部にある程度で、周辺居住地域からのアクセスは大変悪い状況である。そのため、児童生徒がスポーツ活動に触れる機会は、ほぼ体育や保健体育の時間に限られており、その他、学校やPTAで呼びかける行事があれば参加する程度である。卒業後についても、休日や仕事以外の時間を自宅や施設で過ごすことが多く、スポーツ活動に熱心に取り組んでいる様子はほとんど見られない状況である。

(2) 本事業をとおして目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

障害者スポーツ指導員等により指導を受けることで、障害のある児童生徒のスポーツ経験の拡大を図るとともに、いろいろなスポーツへの興味・関心を高め、余暇やプライベートな時間の充実と健康の保持増進を図ることを目指したい。

また、地域のスポーツ指導員等とのつながりをもつことや、地域の運動施設を利用することにより、障害のある児童生徒も様々な運動の機会があることの理解を深めるとともに、地域の方々への障害者スポーツの理解を深めることを目指したい。

(3) 自校の取組内容

ア 地域スポーツ活動の充実のための地域連携について

地域のスポーツクラブでは、平川ジュニアアスリートサークルと、地域の福祉機関では、障害児入所施設「もみじ学園」と、地域の小・中学校・高等学校の部活動等では、青森県立尾上総合高等学校と、その他では、弘前大学バスケットボール部と連携する。

イ 地域スポーツ活動を実施する場所について

活動場所は、自校の体育館、自校に併設するもみじ学園園庭、青森県立尾上総合高等学校グラウンドとする。

ウ 障害者スポーツ指導員等との連携について

指導に当たっては、平川ジュニアアスリートサークル代表、平川市立金田小学校校長須々田孝聖氏、青森県障害者フライングディスク協会会長の齊藤誠氏、弘前大学教育学部長講師の本間正行氏の3名を講師として招く。

(4) 実施内容

特別支援学校等における体育・運動部活動等の推進として、以下3つの取組を行う。

ア 青森県障害者スポーツ大会参加者練習会

本校体育館、もみじ学園園庭、青森県立尾上総合高等学校グラウンドで、講師に平川ジュニアアスリートサークル代表の須々田孝聖氏、青森県障害者フライングディスク協会会長の齊藤誠氏を招き、青森県障害者スポーツ大会に参加予定の中学部と高等部の生徒の中から希望する生徒を対象に、3・4回程度、放課後や夏季休業日を利用した陸上競技・フライングディスク競技の練習会を行う。

イ 青森県特別支援学校総合スポーツ大会・プレ大会に向けた中学部・高等部合同授業

本校体育館、もみじ学園園庭で、講師に平川ジュニアアスリートサークル代表の須々田孝聖氏、青森県障害者フライングディスク協会会長の齊藤誠氏、弘前大学教育学部長講師の本間正行氏を講師として招き、中学部と高等部の全生徒を対象に、9月に1回、通常の保健体育の授業時間における陸上競技・フライングディスク競技・バスケットボール競技の練習会を行う。

ウ バスケットボール教室・バスケットボール交流会

本校体育館で、講師に弘前大学教育学部長講師の本間正行氏を講師として招き、高等部

の全生徒を対象に、10月に2回、通常の保健体育の授業時間におけるバスケットボールを楽しむための教室を行う。

2 事業の成果と課題

(1) 自校の児童生徒の変容

本事業を通じて、各事業で取り上げたスポーツ種目に、昼休み時間に積極的に取り組むようになったり、長期休業中に学校以外の場所で運動に取り組むようになったりするなど、運動やスポーツに自主的に取り組む姿が見られるようになり、体を動かす機会が増えた生徒が多かった。

また、講師の方々から、競技における専門的な技術指導をしていただき、練習を重ねたことで、競技力の向上が図られ、大会で好成績を収めることができた生徒が多かった。成功経験が積み重なったことが自信につながったのか、自分から準備や片付けに協力するようになったり、友達とのコミュニケーションを苦手としていた生徒が、競技について友達に教えるようになったりした。さらに、これをきっかけとして、スポーツ以外にも、学級代表としての活動をする役割に手を挙げたり、話し合い活動に積極的に参加するようになったりと、いろいろなことに挑戦するようになった生徒もいた。

(2) 地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくりに関する成果と課題

これまで本校でスポーツ活動を実施する場合、学校を拠点とすることが多かったが、本事業では、本校所在地や生徒の居住地に比較的近い公共の施設で活動を実施した。生徒の中には、家族とその施設までのアクセスを調べたり、通うための練習をしたりし、自力で行き来することが可能となった生徒がいた。それにより、保護者が仕事で都合がつかない日でも、自力で出かけ、スポーツ活動に参加することが可能となった。

講師を招いてのスポーツ活動では、地域の学校の先生方や障害者スポーツの指導員の方に本校生徒の実態を見ていただき、彼らの可能性を引き出していただいた。校外でのスポーツイベントにも主体的に参加するようになった生徒もおり、イベントで会ったときには、照れながらも親しげに話をし、自分を応援してくれる人が側で見ていることに安心して参加するなど、校内とは違った姿が見られた。

一方で、一人で行動することが難しい児童生徒への継続的なスポーツ活動の基盤づくりの難しさを感じた。

3 今後の展望等

本校生徒の多くは、本事業を通して初めて本格的に運動・スポーツに挑戦することになったのではないと思われる。環境面であまり恵まれているとは言えない本校の児童生徒が、生涯に渡って運動・スポーツに取り組むためには、家庭や関係機関との連携が不可欠であるが、本事業を通して、どのような問題があるか、どのような解決方法があるか、児童生徒が運動・スポーツ活動に参加することができるかを考え、模索する機会とすることができた。大切なのは、これらの活動を継続することである。そのためには、学校として地域の関係機関とのつながりを絶やさず、児童生徒らとつなげておくことが重要であると考えます。

また、本事業では、小学部児童を対象とした取組を実施することができなかった。今後は、小学部から中学部へのつながりや、学校全体としてできることを検討し、運動・スポーツの経

験の幅を広げ、深めると共に、裾野を広げていきたい。

(ス) 浪岡養護学校

1 事業計画

(1) 自校の児童生徒のスポーツに関する現状と課題

体を動かすことが好きな児童生徒もいるが、病気による運動制限等もあり、大半の児童生徒は学校外でスポーツをすることはほとんどない。これまでその機会もあまりなかったためか、運動をするという習慣がない。また、児童生徒の実態から地域の催し物等へ参加することが難しい場合も多く、地域とのつながりも希薄になりがちである。そのため、卒業後も自ら進んで運動に親しもうとする児童生徒は非常に少ない。将来、自分で体調管理し、健康を保っていくためにも、スポーツの楽しさを味わい、継続して取り組んでいく能力や態度を育む必要がある。

(2) 本事業をとおして目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

児童生徒が継続してスポーツに取り組めるよう本校の施設を使用して、児童生徒と地域のスポーツクラブや関係機関等が共同で運動や各種スポーツに取り組む活動を計画する。その中で児童生徒が家庭や地域、また卒業後も取り組めるような内容を取り上げることで、運動習慣の確立を図っていきたい。スポーツクラブや関係機関等の方々とスポーツを通して、体を動かすことの楽しさを味わうとともに、心身の調和を図り、地域との交流を深めながら良好な関係づくりも目指していきたい。そのためにも家庭や地域などの身近な場所で運動や各種スポーツができる環境を整えることが、児童生徒だけでなく、地域の方々の健康と生きがいにもつながり、生涯スポーツの推進につながるものと考えます。

(3) 自校の取組内容

ア 地域スポーツ活動の充実のための地域連携について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	地域のスポーツクラブとの連携 (団体名：青森スポーツクラブ Wandaji)	○
2	地域の福祉機関との連携	
3	地域の小・中学校・高等学校の部活動等との連携	
4	地域の他の特別支援学校との連携	
5	地域の町内会・老人会等との連携	
6	その他 (県障害者スポーツ指導員会との連携)	○

イ 地域スポーツ活動を実施する場所について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	自校の施設を開放して実施	○
2	他校の施設を活用して実施	
3	地域の施設（学校以外）を利用	
4	その他	

ウ 招へいする障害者スポーツ指導員等

	所属団体等	役職等	氏名
1	県障害者スポーツ指導員会		由谷 守
2	県障害者スポーツ指導員会		須藤和彦

(4) 実施内容

実施内容は大きく分けて2つある。ひとつは体育の時間に、県障害者スポーツ指導員会の外部講師を招請し、運動前の準備体操やストレッチ、ランニングやジョギング、運動後の整理運動等の活動を8月から11月に5回程度実施する。道具を使用しない簡単な運動を、体育の授業に取り入れ継続して行い、休日や卒業後も手軽に取り組むことができるようにする。もうひとつは精神障害者のソフトバレーボールチーム「青森スポーツクラブ Wandaji」を本校に招き、ソフトバレーに親しむ活動を5回程度実施する。障害者スポーツ指導員の資格保有者から指導を受けることで、ソフトバレーの楽しさを味わいながら、より専門的な技術指導が受けられる。児童生徒には、心理面での不安定さがあるが、対応に理解のある指導者とそのチームとの活動は心理的な安定を図りながら、スポーツへの意欲を引き出すことができると考える。

2 事業の成果と課題

(1) 自校の児童生徒の変容

本事業での取り組みは、小集団での学習活動が多い本校の児童生徒にとって、集団を経験するよい機会となった。小・中・高等部の合同体育の時間を設定し、無理なく自分のペースで参加ができるストレッチやランニングなどを「健康トレーニング教室」として実施した。講師による「健康に生活する上で大切なこと」についての指導を通して、自分で体調を管理しながら、健康を保持していこうとする意識付けが図られた。また、周りの児童生徒と関わりながら取り組むことで、集団活動での学習効果も得られた。この教室をきっかけに家庭でストレッチを継続して取り組んでいき、自分の体が柔らかくなっていく様子を感じる児童生徒もおり、学校外で運動に取り組むきっかけにもなった。

実施後行ったアンケート結果では、本事業を通して運動が「好きになった」、「前から好きだったが、もっと好きになった」という児童生徒が約半数であった。また、「今後も運動やスポーツを続けたいか」という質問には、ほぼ全員が「もっとやりたい」「今のまま（体育や昼休みの運動など）で良いが続けたい」と回答した。様々な体の動かし方や運動の楽しさを知ったことで、昼休みに体育館でスポーツをして体を動かす児童生徒、テレビでスポーツ観戦をする児童生徒が増えた。

生徒が自ら健康管理に努め、運動習慣を身に付けるためには、健康の維持について理解を深めながら、自分に合った運動内容を知り継続して行うことが必要であると考え。

(2) 地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくりに関する成果と課題

地域のスポーツクラブとの活動を本校体育館において、休日を利用して4回実施した。集団活動が苦手な生徒が多いことや、送迎可能な家庭が少なかったことから、2名の参加ではあったが、クラブ練習と一緒に参加することができ、とても貴重な経験となった。技術の基本練習とゲーム形式での実践練習を行い、生徒はアドバイスを受けながら、意欲的に取り組んでいた。ボールを仲間へつなぐことや、常に声を掛け合うなど、団体競技のおもしろさを

味わうことができた。参加した生徒は、「もっとやりたい」「もっと上手になりたい」という気持ちが強く芽生え、「チームの練習にもこれから参加し、今後も関わっていきたい。」と話した。本校での練習が全日程終了した後、練習に参加していた2名はチームに正式入会し、別会場で行っている練習にも定期的に参加している。

本事業の実施により、地域のスポーツクラブとのつながりができ、身近な場所にスポーツができる環境があることを知ることができた。生徒が継続的にスポーツを実施できるようになるために、今回の活動のようなきっかけとなる機会と生徒の実態に応じた支援が必要であると考えます。

3 今後の展望等

児童生徒が運動をする習慣を育てていくため、健康トレーニング教室で実施した運動を各学部の体育の授業に取り入れ、指導を継続する。同時に、生徒が普段の生活の中で自ら取り組める内容の運動を新たに加え、授業等で紹介、実施していく。本校では、児童生徒の多様な実態に応じた指導が求められるため、指導体制の工夫、指導力の向上にも努める必要がある。また、学校での指導が家庭でも継続されるように保護者と連携し、児童生徒の運動習慣の確立を図りたい。更に、地域のスポーツクラブ等と連携し、交流活動等をきっかけに本校への理解啓発と情報共有を行い、余暇活動として運動に取り組める環境整備につなげたいと考える。

(セ) 七戸養護学校

1 事業計画

(1) 自校の児童生徒のスポーツに関する現状と課題

本校は小・中・高の3学部からなる知肢併設の特別支援学校である。どの学部においても、体育や自立活動等の時間を使って運動に取り組み、運動習慣の形成を目指しているが、小・中学部には、学校以外の場でスポーツに取り組む児童生徒はほぼ見られず、青森県の障害者スポーツ大会に参加する児童生徒も少ない。高等部は、人数は少ないもののスペシャルオリンピックに参加するなど個人でスポーツに取り組む、卒業後も続ける生徒がいる。また障害者スポーツ大会にも、毎年10名前後が参加している。

(2) 本事業をとおして目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

特別支援学校スポーツ大会への参加を契機に、障害の有無に関わらず取り組みやすいフライングディスクやボッチャなどの競技に親しみ、スポーツの楽しさや継続することで上達していく達成感を味わう機会を充実させたい。そのために、地域の障害者スポーツ指導員や障害者スポーツに取り組んでいるチーム、本校の指導員と連携して、専門的な指導を受けられる機会を継続的に設定する。技術が向上することと競技できる場を理解すること、そして憧れとなるような競技者と出会うことで、児童生徒は一層運動に意欲的に取り組むことができると考える。本事業をとおして卒業後も参加できる障害者スポーツ大会の参加者が増えること、また余暇としてスポーツが選択肢の一つになることを期待している。

(3) 自校の取組内容

ア 地域スポーツ活動の充実のための地域連携について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
--	------------	-----------

1	地域のスポーツクラブとの連携	
2	地域の福祉機関との連携 (団体名：社会福祉法人海陽会 身体障害者授産施設 あすなろクリーナース)	○
3	地域の小・中学校・高等学校の部活動等との連携	
4	地域の他の特別支援学校との連携	
5	地域の町内会・老人会等との連携	
6	その他 (校内の障害者スポーツ指導員有資格者との連携)	○

イ 地域スポーツ活動を実施する場所について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	自校の施設を開放して実施	○
2	他校の施設を活用して実施	
3	地域の施設（学校以外）を利用	
4	その他	

ウ 招へいする障害者スポーツ指導員等

	所属団体等	役職等	氏名
1	あすなろクリーナース	所長	福沢 和彦
2	フリー映像制作		櫛引 宏一
	七戸養護学校	臨時講師	福岡 明子

(4) 実施内容

中学部体育の授業でフライングディスクやボッチャに取り組み、その際に障害者スポーツ指導員の方々に専門的な技術指導を依頼する。その後、青森県特別支援学校スポーツ大会に参加し、練習の成果を発揮する。その後も授業や学部行事などで定期的に取り組み、最後に福沢氏が普段指導をしているチームの選手と対戦、交流をする。

2 事業の成果と課題

(1) 自校の児童生徒の変容

本事業を契機に、保健体育の授業の中で、フライングディスクとボッチャ競技に取り組んだ。障害者スポーツ指導員の方を授業講師としてお招きしたことで、競技ルールや体の使い方など、専門的なことを学ぶことができ、知識や技能が向上した。

主にフライングディスクに取り組んだ生徒は、ディスクが真っ直ぐ飛ぶときと曲がってしまうときの違いが、ディスクを持つ角度であることに気付き、できるだけディスクを水平にして投げようと練習を繰り返す様子が見られたり、車椅子姿勢で参加した生徒が、ディスクを真っ直ぐ飛ばすためには車椅子の角度を変える必要があると自分で気付き、練習を繰り返しながら車椅子の角度を調整したりするなど、思考力や学びに向かう姿勢に成長が見られた。また、生徒のうち1名は、青森県特別支援学校スポーツ連盟設立準備委員会フライングディスク部門の強化指定選手に選出され、今後も継続して取り組むことになった。

主にボッチャに取り組んだ生徒は、練習や特別支援学校総合スポーツ大会・プレ大会の参

加をとおして、どうしたら勝てるのか作戦を生徒同士で考えることができるようになった。
また、対戦相手の良いプレーに拍手を送るようになり、人間性にも成長が見られた。

(2) 地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくりに関する成果

今年度、本事業を通じて障害者スポーツに取り組むにあたって、保健体育の年間指導計画に、障害者スポーツの単元を20時間設定した。今年度取り組んだところ、積極的に取り組む生徒が多く見られ、障害の程度に関わらず取り組みやすいことも実感できたため、次年度も中学部の年間指導計画に時間を設定することになった。また、青森県特別支援学校スポーツ連盟設立準備委員会フライングディスク部門の強化指定選手に選出された生徒は、これから定期的に強化選手として練習に取り組むこととなる。これを機に青森県障害者スポーツ大会への参加も促し、生涯にわたって、運動に親しむ意識を高めていきたい。

また、本校の卒業生を対象とした同窓会の交流行事でも障害者スポーツを取り上げ、今年度はボッチャに取り組んだ。スポーツをとおしての交流は、参加者同士のやり取りが活発になり、好評だった。今後も定期的に交流行事で障害者スポーツに取り組み、スポーツができる機会や場を設定していく予定である。

3 今後の展望等

今年度の成果と課題を踏まえて、次年度以降は、学部間を超えて指導体制を整備したり、取り組む時期を相談して共同で年間指導計画を作成したりして、校内の指導体制を整えたい。また、特別支援学校総合スポーツ大会・プレ大会への参加を機に、強化練習に参加した生徒をモデルケースにして、余暇・生涯スポーツとして運動に親しむ生徒が増えていくように取り組んでいきたい。

(ソ) むつ養護学校

1 事業計画

(1) 自校の児童生徒のスポーツに関する現状と課題

新体力テストの結果は、男女ともに全国平均を大きく下回り、約3割の児童生徒が肥満傾向であった。地域には多くのスポーツクラブやスポーツ施設があるものの、利用している児童生徒はほとんどおらず、運動する機会の少なさが影響しているものと推測される。また、地域スポーツとの繋がりが少ないため、卒業後もスポーツを習慣的に行っている卒業生はいないのが現状である。在学中に地域のスポーツクラブや施設利用につなげ、スポーツの習慣化、継続化が課題である。

(2) 本事業をとおして目指したい地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくり

ア 地域のダンススクールの講師を招いてヒップホップダンスの授業を行う。ダンスが好きな児童生徒が多いことから、興味・関心の高い教材を選択することで、生涯学習の基盤づくりを目指す。

イ グラウンドゴルフの指導員を招いての技術指導を行う。グラウンドゴルフは、高度な技術を必要とせず、ルールも簡単であり、誰でも参加できるという点から、平成30年度から本校高等部で取り入れている単元であり、生徒にとって馴染みのあるスポーツである。興味・関心が高く馴染みのあるスポーツに取り組む場面を定期的に設けることで、スポーツ

の楽しさを味わい、運動の習慣化のきっかけづくりとしたい。

ウ ダンスやグラウンドゴルフができる場が身近にあるということを知り、余暇としての活用や生涯スポーツとしての知識や技能を身に付けるための一助としたい。

(3) 自校の取組内容

ア 地域スポーツ活動の充実のための地域連携について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	地域のスポーツクラブとの連携	
2	地域の福祉機関との連携	
3	地域の小・中学校・高等学校の部活動等との連携	
4	地域の他の特別支援学校との連携	
5	地域の町内会・老人会等との連携	
6	その他 (むつ市ダンススタジオ JACK BOX、むつグラウンドゴルフ協会との連携)	○

イ 地域スポーツ活動を実施する場所について

	事業における取組内容	自校が取り組む内容
1	自校の施設を開放して実施	○
2	他校の施設を活用して実施	
3	地域の施設（学校以外）を利用	
4	その他	

ウ 招へいする障害者スポーツ指導員等

	所属団体等	役職等	氏名
1	むつ市ダンススタジオ JACK BOX	代 表	駒井慎也
2	むつグラウンド・ゴルフ協会	理事長	川原田俊一

(4) 実施内容

地域のスポーツ指導員等（ヒップホップダンスの実技指導 5 回、グラウンドゴルフの実技指導 5 回の計 10 回）を体育の授業に招いて実施する。

2 事業の成果と課題

(1) 自校の児童生徒の変容

ア ダンス

どの生徒にとっても興味・関心が高く、これまでも体育や音楽（身体表現）の授業で取り組んできた。ダンススクールの指導員から専門的な知識や技能を学んだことで、回を重ねるごとに「楽しい」から「もっと上手になりたい」「オリジナルの振り付けを考えてみたい」という気持ちが生まれ、中には、休み時間や帰宅後に自宅等で練習する生徒がいた。同様に、事後アンケートでも、学校以外の場所でダンスをする機会が増えたという回答が多く見られた。このことから、新しいことにチャレンジしようとする気持ち、継続して運動に親しむ態度の育成につながったと考える。

イ グラウンドゴルフ

平成 30 年度に引き続き指導員を招き、専門的な指導を継続して受けたことにより、ルールの理解や技能の向上を図ることができた。計 5 回の实地練習を通して、多くの生徒が基本のフォームを習得し、ホールまでの距離に合わせて力を加減しながら打てるようになった。また、屋外に設置した簡易の練習コースをグループ別にラウンドすることで、チームプレーの大切さやグラウンドゴルフの楽しさを味わうことができた。

(2) 地域スポーツ活動の充実及び生涯学習の基盤づくりに関する成果と課題

「現代的なリズムのダンス（ヒップホップダンス）」は本校にとって初めての試みであったが、指導員から専門的な知識や技能を学んだことで自信をもてるようになり、「もっとやりたい」という意欲が芽生え、ダンススクールの所在や受講料について、複数の生徒から指導員に尋ねる場面があった。身近な場所にダンススクールやグラウンドゴルフ協会があることがわかり、地域スポーツ活動や生涯学習に対する動機付けの第一歩になったと感じている。

また、授業時の素直でまじめな態度、ひたむきに練習する姿、技術を次々に習得し予想以上に上達していく姿など、生徒一人一人の可能性について指導員それぞれが感銘を受けていた。本事業を通して、地域の指導員が障害のある生徒への理解を深めることができたことで、障害者が地域スポーツ活動に参加しやすい環境づくりの一助となったと考える。本事業を通じて、指導員の意識の変容につながったことも大きな成果と考える。

ダンスに対して苦手意識の強い生徒に対する学習内容や方法が課題となった。またグラウンドゴルフでは、自然という開放感の中でプレーした経験から「またやりたい」「もっとやりたい」という回答が事前アンケートに比べて 3 割増えたにも関わらず、用具や整備されたコースが必要という捉えからか、「気軽にできない」という回答もあった。学んだ技術や味わった楽しさを生涯スポーツへとつなげることのできる環境づくりが今後の課題であると考ええる。

3 今後の展望等

本事業の取り組みによって、生徒のダンス及びグラウンドゴルフへの興味・関心は確実に高められ、同時にスポーツの楽しさや喜びを味わうこともできたと思う。その高められた興味・関心、感じた楽しさや喜びを、スポーツの習慣化と継続化につなげるために、今後は学校外での活動も取り入れ、スポーツを通して地域の人々と交流していきたいと考えている。

ダンスの指導員が、本校生徒が取り組む姿勢に感銘を受け、「スクールが主催する発表会に出場してもらいたい。」と話していた。今回の繋がりをきっかけに今後もダンススクールと連携することで、地域で行う発表会に参加したり、学校にダンススクールの生徒を招いて交流したりすることが可能となり、ダンスを通して互いを理解する輪が少しずつ広がることが期待できる。また、グラウンドゴルフにおいても、毎年むつ市で行っているグラウンドゴルフ交歓大会に生徒を参加させたり、グラウンドゴルフ協会の方々と一緒に実際のコースでプレーしたりすることでより楽しさを味わえ、同様な効果が期待できると考える。

今後はむつ市内で行われているスポーツについて更に調査し、ダンスやグラウンドゴルフ以外にも様々なスポーツを幅広く取り入れていくことで、地域のスポーツと繋がり、卒業後の余暇として、または生涯スポーツとしての習慣化、継続化を実現していきたい。

(2) 青森県特別支援学校総合スポーツ大会の開催

令和元年10月4日（金）、新青森県総合運動公園において、県立特別支援学校（知的障害、肢体不自由、病弱）15校が参加する「青森県特別支援学校総合スポーツ大会・プレ大会」を開催した。本大会は令和2年度の本大会に向けて試験的に実施するものであり、県内の特別支援学校の生徒が参加する大会としては初開催となるものである。

競技種目としては、各校が（1）において取り組んだ競技を中心に据え、ボッチャ、フライングディスク、バスケットボール、サッカー、陸上競技の5種目を実施することとしたほか、本県で今後開催が予定されている障害者スポーツ大会の選手育成につなげるため、体験教室という形で、バレーボール教室、ベースボール教室を行った。

総参加人数の約1200人のうち、特別支援学校の生徒は555人であった。運営スタッフとして県立高等学校の体育・スポーツ関係の学科に在籍する生徒が119人参加しており、障害のある生徒と障害のない生徒が親交を深める機会となった。（Table.1）

Table 1 来場実績

摘要	人数
来場生徒（内競技参加生徒）.	555人（525人）
引率教員	245人
高校生ボランティアスタッフ	119人
来賓	27人
競技スタッフ	19人
審判員	40人
参観者	約200人
報道	5人
合計	約1200人

県立高等学校の生徒を対象に実施した事後アンケートでは、「障害があっても一生懸命取り組んでいた。」、「楽しくプレーしていた。」、「必死に真剣に取り組んでいた。」という態度面での感想のほか、「技術が高かった。」、「フェアプレーを心がけていた。」のような競技そのものに高い評価をする生徒もいた。

参加生徒ほぼ全員が、「次回も参加したい。」、「障害者理解につながった。」と回答しており、スポーツを通じた相互理解の推進への高い可能性が感じられた。

一方、参加した特別支援学校の生徒のうちアンケートに回答が可能な300人を対象に実施した事後アンケートでは、ほとんどの生徒が大会に前向きな感想をもち、「今後もスポーツを続けたいか?」という質問には、225人が「続けたい」と回答するなど、主体的にスポーツに取り組む習慣がなかった生徒に大きな変化が見られ、多くの生徒にとって、本大会が、学校卒業後も日常的にスポーツに取り組む素地を醸成するための大きなきっかけになったことが示唆された。

また、大会プログラムやポスターについては、特別支援学校の生徒が原画等を手がけるなど、参加するだけでなく、生徒が作り上げる大会となるよう配慮した

ほか、ポスターを地域に掲示するなど、地域社会への理解啓発を図った。



大会ポスター



大会プログラム



選手宣誓



バレーボール教室



開会式司会



サッカー



フライングディスク（ディスタンス）



バスケットボール



ボッチャ



学校対抗リレー

4 今後の展望等

(1) 児童生徒の変容について

本事業を通じて、児童生徒の健康教育におけるスポーツ習慣の育成等について、「育成を目指す資質・能力」を踏まえ、どのような変容があったかについて各学校に調査した。

「知識・技能」に関しては、以下のことが挙げられた。

- ・ 高い技術を身につけることができた。 (肢体不自由)
- ・ 正しい技術を身につけることができた。 (知的障害・肢体不自由)
- ・ 体調管理の重要性が理解できた。 (肢体不自由・病弱)
- ・ スポーツ施設の利用方法が理解できた。 (肢体不自由)
- ・ スポーツの基礎的な知識が身についた。 (知的障害)
- ・ 基礎体力が向上した。 (知的障害)
- ・ 集団行動の技能が向上した。 (病弱)

※ () 内は、変容として挙げた学校が主として対象とする障害種
大会参加を目標に、障害者スポーツ指導員等の外部専門家の指導を受けることにより、多くの児童生徒が各種の運動の特性に応じた技能等並びに健康・安全についての理解を深め、目的に応じた技能を向上させることができた。

「思考力・判断力・表現力」については、以下のことが挙げられた。

- ・ 競技の助言や説明をすることができた。 (知的障害・肢体不自由)

- ・指導者に質問することができた。（知的障害・病弱）
- ・よりよい体の使い方を工夫することができた。（肢体不自由）

※（ ）内は、変容として挙げた学校が主として対象とする障害種と一緒に活動した高齢者や高等学校の生徒に対して、自分から障害者スポーツについての説明や体の動かし方について助言したり、一緒に考えたりするなど、各種の運動や健康・安全についての自他や社会の課題を自ら発見し、その解決に向けて仲間と思考し判断しながら、目的や状況に応じて他者に伝える力が育成された。

「学びに向かう人間性等」については、以下のことが挙げられた。

- ・意欲的にスポーツに取り組むようになった。（全障害種）
- ・仲間と取り組むことの楽しさや心強さを味わうことができた。（知的障害・病弱）
- ・目的に向けて主体的に技術向上に取り組むことができた。（全障害種）
- ・スポーツ大会への意欲につながった。（知的障害・肢不不自由）
- ・スポーツの楽しさを味わうことができた。（知的）
- ・外部のスポーツクラブへの参加を希望した。（肢体不自由）
- ・友達との関わりが豊かになった。（知的障害）
- ・スポーツへの関心が高まった。（病弱）

体験したスポーツを継続的に行うため、地域のクラブに家族と一緒に参加希望の問い合わせをしたり、目的をもって自ら練習に励むなど、自分が居住する地域において、同じスポーツを楽しむ仲間とつながりながら、自分自身の力を最大限に発揮し、生涯にわたって継続して運動に親しむことや、健康の保持増進と体力の向上を目指し、明るく豊かで活力ある生活を営む態度が育成された。

（２）各校が企画した地域スポーツ活動

本事業において、各特別支援学校が連携した機関等は Table. 2 のとおりとなった。障害者スポーツ活動のリソースが少ない本県においては、単独で活動を継続的に実施できる機関がほぼ無い状況であり、単に学校施設を開放するのみでは、不十分である。

そこで、学校体育や特別活動、教育課程外の部活動等に外部機関の協力を得ることから始め、徐々に児童生徒、そしてその家族が主体的に地域活動に参加するための橋渡しを丁寧に進めていくことが重要と考えられた。

Table 2 連携した機関等

機関等	連携した学校数（延べ数）
地域の統合型スポーツクラブ等	5校
地域の福祉機関	4校
地域の学校	3校
地域の町内会等	3校
その他	4校

実施したスポーツの内容については、Table. 3 のとおりであり、青森県特別支援学

校総合スポーツ大会で実施するスポーツが中心となったが、障害が重度で重複している児童生徒のスポーツ活動推進のため、ウォーキングやエアロビクス、ダンスなど障害の特性に合わせた多様な活動が企画された。

Table 3 実施したスポーツ

スポーツ	実施した学校数（延べ数）
フライングディスク	10校
ボッチャ	7校
バスケットボール	4校
サッカー	4校
陸上競技	4校
その他	5校

（３）成果と課題

本事業の成果として、大きく次の３点が挙げられる。

- ・障害のある生徒のスポーツに対する意欲・技術・知識が高まり、継続的にスポーツに取り組もうとする態度が育成された。
- ・障害のある生徒の地域への帰属感・安心感が高まり、地域活動への参加や地域ネットワーク形成のきっかけとなった。
- ・障害のない生徒や地域の障害理解が深まった。

スポーツの技能向上・健康という側面だけではなく、地域活動として取り組んだことによる障害理解の促進や地域ネットワークの強化という面が、障害のある児童生徒が生涯にわたってスポーツに親しみ、地域の一員として生活していくために効果的であったと考える。

今後は、今年度の取組を基に、さらに地域の方々を学校活動に巻き込むとともに、児童生徒が主体的に地域スポーツ活動に参加できるような橋渡しをしていく必要があると考える。そして、青森県特別支援学校総合スポーツ大会が児童生徒にとって目標となる、夢の実現の場となるよう、一層、企画を練り上げていきたい。

一方、課題としては、以下の３点が挙げられる。

- ・専門性の高い指導員（教員を含む）の育成。
- ・人的支援（送迎、情報保証、身体的介助等）の不足。
- ・視覚障害・聴覚障害特別支援学校生徒の参加促進。

障害のある児童生徒がスポーツを実施する場合、多くの善意のボランティアに支えられている。財政的な後ろ盾が無い中で障害者スポーツを実施する場を維持することは非常に困難な状況にある。各県立特別支援学校からは、事業終了後に対する不安感が訴えられており、事業期間中にできるだけ費用のかからないシステムを構築する必要があると考えられる。

県教育委員会としては、これらの課題を踏まえ、引き続き、障害のある児童生徒が継続的にスポーツに親しみ、生きがいをもち、健康に生活するための基盤づくりに努めていきたい。